

2024 年 3 月 6 日

## 2023 年度「国際哲学特講」アルザス研修報告

法政大学文学部哲学科 君嶋泰明（引率）

### 目次

- 1 概要
- 2 研修の内容
- 3 合同ゼミの内容
- 4 参加学生の言葉から
- 5 写真でたどるアルザス研修

### 1 概要

「国際哲学特講」は、法政大学文学部哲学科の主催する選択必修科目「哲学特講」の一つです（秋学期 2 単位）。この科目では、フランスのアルザス欧州日本学研究所（CEEJA）の協力を得て、学期の最後、2 月初めに、フランスのストラスブール大学（担当：黒田昭信先生）とドイツのハイデルベルク大学（担当：ユディット・アロカイ先生<sup>1)</sup>）との合同ゼミを含む海外研修を行っています。

2 月初めに行われる合同ゼミは、三大学それぞれにおける正規の授業の一環です。ストラスブール大学と法政大学、ハイデルベルク大学と法政大学のそれぞれの間で、合同ゼミで扱うテキストやテーマを選定し、9 月から 1 月までの授業期間、それぞれの大学ではそのテキストやテーマに関する学習を進めます。そしてそれと並行して、参加学生は授業外でもテキストやテーマについての研究を行い、その成果を 2 月の合同ゼミで発表します。

とくにストラスブール大学と法政大学の学生は、日仏混合グループを作り、そのグループでの共同発表を目指して、授業外でも連絡を取り、Zoom でミーティングを行ったりしながら準備を進めます。そして 12 月を除き、毎月 1 回オンラインで合同授業を実施し、進捗報告や発表内容の検討を行います（今年度は 9 月 26 日、10 月 24 日、11 月 21 日、1 月 9 日）。この試みは

---

<sup>1)</sup> 昨年度までご担当のハンス・マーティン・クレーマ先生から交代となりました。

昨年度から始まりましたが、今年度は昨年度の反省を踏まえてさらなる改善を図りました。

本年度の研修は、ハイデルベルク大学（2月5日）とストラスブール大学（2月6日、7日）で合同ゼミを行ったほか、CEEJA 学術部門副所長のレギーヌ・マティアス先生にご講演をいただきました。またゼミの合間をぬってハイデルベルク、アルザスの名所旧跡を見学しました。

## 2 研修の内容

法政大学の参加学生は19名（4年生2名、3年生2名、2年生15名）です。2月4日（日）に出発し、11日（日）に帰国しました。現地では全行程にわたり徳江純子氏（CEEJA 研究・教育部門責任者）、フレデリック・エブラール氏（同ディレクター補佐）がアレンジ・同行してくださいました。またフランスでの日程ではストラスブール大学日本学科の修士課程の学生二名が同行し、サポートしてくださいました。

以下、研修の内容を時系列順に、簡潔に記します。

### ■ 2月4日（日）

羽田空港発、フライブルク空港到着。

バスでハイデルベルクに移動。ホテル泊。

### ■ 2月5日（月）：合同ゼミ（ハイデルベルク大学）

午前、ハイデルベルク大学にて合同ゼミ。大学の食堂にて昼食（日独合同）。

午後、ハイデルベルクの旧市街見学（ハイデルベルク城等）。バスでコルマールへ移動。

着後、レストランにてCEEJAのアカデミック・クラブ歓迎夕食会。

コルマールのホテル泊。

### ■ 2月6日（火）：合同ゼミ（ストラスブール大学）

終日、ストラスブール大学にて合同ゼミ。

大学近隣のレストランにて昼食（日仏合同）。

ゼミ後、バスでリクヴィル村へ。見学後、レストランにて夕食。

コルアールのホテル泊。

### ■ 2月7日（水）：合同ゼミ（ストラスブール大学）

バスでストラスブールに移動。

午前、引き続き合同ゼミ。

午後、ストラスブール旧市街見学（大聖堂等）、自由昼食・フィールドワーク後、レストランにて夕食。

コルマールのホテル泊。

#### ■ 2月8日（木）

午前、コルマールにてマティアス先生による講演。ヨーロッパにおける日本のステレオタイプがいかにして生まれ、変遷したかを踏まえ、ステレオタイプの機能やそれへの向き合い方についてお話しいただく。

午後はレストランにて昼食後、ナッツヴァイラー・ストリューホフ強制収容所見学。

コルマールにて夕食、ホテル泊。

#### ■ 2月9日（金）

午前、オーケーニスブール城見学。

午後はレストランにて昼食後、コルマール旧市街見学（ウンターリンデン美術館等）、市内レストランにて夕食。

コルマールのホテル泊。

#### ■ 2月10日（土）

午前、バスでバーゼル空港に移動。フランクフルト空港を経由して羽田空港へ。

#### ■ 2月11日（日）

羽田空港に到着。

### 3 合同ゼミの内容

本年度のストラスブール大学との合同ゼミに向けた準備は、黒田先生の二つの論考「他性の沈黙の声を聴く——植物哲学序説」（『現代思想』2021年1月号所収）と「食べられるものたちから世界の見方を学び直す——個体主義的世界観から多元的コスモロジーへ」（同2022年6月号所収）を読み、初回のオンライン合同授業（9月26日）において学生一人一人が感想を述べることから始まりました。

合同ゼミの発表テーマは、昨年度は各グループが自由に決めることとしていましたが、意思疎通が必ずしも容易ではない日仏混合グループでの発表準備においては、テーマの選定から学生に委ねることは得策ではないと教員側が判断し、本年度は黒田先生が事前に上述の論考

にかかわる4つのテーマを提示し、第2回合同授業（10月24日）で各グループがテーマを決定しました。4つのテーマとは、環境問題、生命倫理、動物倫理、肉食主義です。これは昨年度の反省を踏まえてのことです。

昨年度からの改善点はもう一つあります。昨年度は、3つの日仏混合グループを作り、それぞれのグループが発表を行いました。時差によるスケジュール調整の困難などから、全員の意見を集約して一つの発表にまとめるのは容易ではなかったという声が少なくありませんでした。そこで本年度は、発表を行うグループを少人数化することとしました。具体的には、全体を4つのグループに分け、それぞれのグループ内に3つのミニグループを作り、そのミニグループ内でテーマに沿ったサブテーマを立て、そのサブテーマに関する発表を各ミニグループが行うこととしました。この策は功を奏し、合同ゼミでは各ミニグループによって個性豊かで充実した発表がなされました。

ただし、以上のことは、本年度のストラスブール大学からの参加者が19名と過去最多であったことにより可能となったことではあります。本年度は参加人数が日仏合わせて38名であったため、グループ分けにおいては、まず9～10名のグループを4つ作り、次にそれぞれのグループ内に3～4名のミニグループを3つ作りましたが、ストラスブールからの参加者が法政並に多かったおかげで、どのミニグループも日仏混合グループにすることができました。もしもストラスブールからの参加者が法政よりも極端に少なかったら、グループは大人数化せざるをえず、別の方策を考える必要があったでしょう。

以下に、各グループおよびミニグループのテーマと発表内容を記します。上述した4つのテーマのうち環境問題に取り組んだグループはありませんでしたが、これはテーマの選定にさいして各グループの希望を優先したためです。

テーマ	サブテーマ	発表内容
グループ A 生命倫理	個性性	個体とは何かについて再考する
	動物を殺すことと肉食	死生観と生命権から肉食について考える
	反種差別主義	反種差別主義はいかにして可能かを考える
グループ B 動物倫理	動物解放論の基礎	動物解放論の基礎としての功利主義と義務論の検討
	動物の権利と人間の責任	人間中心主義から人間の果たすべき責任を考える
	動物倫理と伝統	動物倫理と伝統のありうべき関係について考える
グループ C 肉食主義	カニバリズム	培養肉や臓器移植はカニバリズムかを考える
	菜食主義	菜食主義に対する考え方の日仏比較
	食文化	日仏の食文化の違いについて考察する
グループ D 動物倫理	ペット・家畜	ペットや家畜を通じて動物倫理を考える
	人間の義務・責任	日本での動物福祉の振興に必要なことを考察する
	害獣	害獣を通じて動物倫理を考える



2月6日はこれらの発表と質疑応答を行いました。翌2月7日には、前日の議論を踏まえて以下のテーマをめぐってグループ・ディスカッションを行いました。

- ・肉食を正当化することができるか。できるとしたらそれはどのような根拠によるか。
- ・日本人の動物福祉に対する意識がフランス人と比べて高くない理由としてどのようなことが考えられるか。
- ・動物や環境への配慮が人間の責任や義務だと考えられるのはなぜか。

議論は盛り上がり、さまざまな意見が出て、今回のテーマがいずれもアクチュアルなものでありながら、さまざまな哲学的根本問題に通じていることを確認することができました。また、合同授業などを通じてオンラインでしか話したことのない日仏双方の学生が、対面でのゼミを通じてさらに親睦を深めることができました。

ハイデルベルク大学との合同ゼミは、共通テキストを和辻哲郎の『風土』とし、気候と風土をテーマとした発表・ディスカッションを行いました。法政側の発表では、まず気候という概念の歴史的変遷を瞥見し、時代が下るにつれて気候がローカルなものからグローバルなものとして理解されていくことを押さえました。そのうえで、和辻のいう「風土」が、あくまでローカルかつその土地の文化を形作るものとして考えられていることを確認しました。ハイデルベルク側からは、『風土』にたいする批判的コメントや疑問点などの報告があり、ディスカッションのための話題が提供されました。

その後のグループ・ディスカッションにおいては、法政側の提起した風土と文化、グローバルな気候をめぐるといふ問いを出発点として、さまざまなことが話し合われました。議論では東京の都市空間そのものを一種の風土と捉える新しい視点が飛び出すなど盛り上がり、有意義なゼミとなりました。

#### 4 参加学生の言葉から

帰国後、法政大学の参加学生全員に感想を書いてもらいました。その中から6本を、筆者の了承を得たうえで、ここに転載します。

##### ■学生 A

秋学期を通して、動物倫理について考えた。生命に優劣は付けられるのか、動物の権利はどこまで尊重されるのか、様々な問いと向き合った。その中で、言語が違うことによって伝わらないことにどうすればよいのか分からないこともあった。そして、発表に大きな不安を抱え

ながら、現地に向かった。以下、国際哲学特講を通して感じたこと、特に、ドイツ、フランスでの現地研修についてまとめる。

全員の顔と名前が一致しない状態での出発だった。4ヶ月、一緒に授業を受けていたはずなのに、旅は自己紹介から始まった。そんな不安を他所に羽田からフランクフルトに着く頃には、呼び捨てにできる友達ができていた。そこからは、全てが刺激的で楽しかった。目が覚めてしまい、ハイデルベルクの街を朝、散歩したこと。カテドラルに圧倒されながら、ストラスブールの街に昨日初めて会った友達と繰り出したこと。タルトフランベとアイスバインの大きさに驚いたこと。五感で感じる情報すべてがこの研修を特別なものにしてくれた。現地での様々な出来事を通して、人をカテゴライズしないことの大切さに気付かされた。ハイデルベルク大での合同ゼミでも扱ったように、人間は「風土」によって性格や文化が形成されていくと和辻は述べる。そのような側面もたしかにあるが、今回の研修を通して、人はもっと複雑で、人と人としての関わりが大事なのだと再認識させられた。例えば、ストラスブール大学の学生さんたちのことを考えた時、私たちはフランス人、学生などという大きな括りで見えてしまうことが多々ある。しかし、実際に会って話して時間を過ごすと、個人個人で同じ問題についての考え方が全く違っていたり、様々な背景を持ちながら生活をしていた。このことから、私は、人と人が会って話し、お互いについて知ろうとすることの重要性を体感した。

また、郷に入っては郷に従えという言葉があるように、フランス、ドイツの風習について肌で感じることもできた点も大きな刺激だった。日本では、お店に入る時にお互いに挨拶はしないが、フランスでは「ボンジュール」と一言挨拶してからお店に入らないと人間扱いしてもらえないと徳江さんに聞いた時は驚いた。そんな風に、自分の常識の外にある習慣を体験出来たことが人をカテゴライズしない自分になることに繋がるのではないかと考えた。

この研修を通して、人と人の関わりについて考えさせられる場面が多くあった。昨日初めて対面したストラスブール大学のみんなとはこんなにも仲良くなれるのかと、人と人の関わりのあたたかさに驚いた。それに対し、ナッツヴァイラー収容所に行った時は、人間、戦争の残酷さ、悲しさに直面し、自然と涙が出てきた。確かに、違う意見を持っている人同士は分かり合えない場面もあるかもしれない。けれど、そこで諦めずにどんな事情、背景、意見を持っているかを知ろうとすることの大切さを実体験と共に知ることができた。

このような経験ができたのも、君嶋先生、徳江さん、黒田先生、事務の方々など多くの人人の支えがあつてのことである。私たちは、次の場所を教えてもらうだけで快適な研修を過ごすことができたのだから。本当に感謝しかない。ありがとうございました。

## ■学生 B

今回の国際哲学特講に参加して強く感じた事は日々のプログラムや集団生活の中で学びがなかった事は何一つとしてなかったという事である。合同ゼミや現地の歴史的建造物の見学から自由時間やホテルの滞在時間までどれをとっても学びのある時間になった研修だと胸を張って言える。

まず、ストラスブール大学との合同ゼミに向けて私たちはストラスブール大学の生徒とオンラインで発表準備を行ってきた。言語の壁や興味の相違もあり、発表準備の段階では議論が難航したが、そのような相手が興味を持っている物事への掘り下げだけでなく自分とは異なった歴史的背景を持つ相手を知ることによって最終的にはお互いの思想の理解を深め、肉食や動物倫理といった今回の議題に対してひとつの答えを提示することが出来たと思う。確かに、哲学を専門とせず母語が日本語ではない生徒との合同発表やその準備は難しく、途方もなく感じることもあったがその分発表をし終え先生方から講評を頂いたときには大きな達成感があった。この達成感と発表し終えた時の安心感は時間をかけてストラスブールの生徒と半学期という時間をかけて密にコミュニケーションを取り、真剣に議題に対し取り組んだからであり、日本の授業では得られないものであったと感じている。また、議題自体も深めていくと個性という問題や環境の中での人間の位置づけという哲学の根本的な問題に行き着き、これから考えなければいけない問題がまたひとつ増えたと言える。

全体的な学びとして、知らない土地では自分でも知らない自分を開拓できるという点と歴史的背景を学び、知ることの重要性という点が挙げられる。今まで行ったことのない土地では、言葉の通じない買い物や現地の方との哲学の議論など今まで経験した事の無いことばかりでその時その時で決断を下さなければならぬが過去の経験にも頼ることが出来無い為、咄嗟の判断力が多く求められた。そのような判断の連続の中で自分でも驚くような判断をすることもあり、新たな自分を自身で発見する研修であったと言える。

また、今回研修で訪れたアルザス地方は国境付近ということもありフランスとドイツどちらの文化も見られると共に両国の争いの場でもあったという複雑な歴史的背景を持っている。これは研修で訪れたナッツヴァイラー強制収容所や市街を見学する上で知っておかなければいけないことであった。収容所も市街にある建物もその当時の必要性や理由があって作られたものであり、それを含有する歴史はそのものの大きな構成要素であることを改めて実感した。そして、歴史や環境が文化を形成し、個人を形成する事からもそのものを有する国の歴史的背景を学習する事は個人や文化理解への一歩として大いに役立つと言える。また、歴史的背景を理解することは個人への理解だけでなく配慮にも繋がるだろう。各個人が持っている背景を理解すれば自ずと取るべき行動の指針が見えると思われる。

以上のような学びは実際に現地に行かなければ得られなかった知見であると言える。現在

では自分の住む土地以外の情報は本やインターネットで容易に知ることができる。しかしながら、現地に行って感じることは当たり前のことではあるが人によって違う為、授業を受けた本を読むだけではなく実際に現地に赴く事でしか分からないことがあると肌で感じた。国際哲学特講を受講する最大の理由はここにあると言える。

最後に今回の研修では現地の生徒だけではなく今回帯同して頂いた徳江さんやシャーリーやラウラ、現地の人々、事務の方々など多くの方々の支えによって成り立っていることを強く感じた。国際哲学特講を支え、多くの時間をかけてくれたことをこの場を借りて感謝したいと思う。長期に渡り国際哲学特講を万全の終える為の準備をありがとうございました。

## ■学生 C

哲学科では、哲学者の考えを学ぶことであるのはたしかだが、それだけでなく、その学びによって自分の思想、考えをさらに広く深くする事ができると私は考えている。そして、この哲学特講の授業では、グループ活動や話し合いなどの人と関わることによる学び、他文化や宗教を知ることによる考えの広がりによって、たくさんの刺激を受け、自分の思想をより深くより広いものにすることができると感じた。

人との関わりによる学びについては、ストラスブール大学との合同ゼミ、ハイデルベルク大学とのディスカッション、徳江さんなど現地の方との関わりの3つの場面で学びを得た。

ストラスブール大学との活動について振り返る。私たち D グループは discord と Google ドキュメントというツールで話し合いを進めた。これらのツールでは、他ミニグループの進捗も可視化されるようにしていた。これにはミニグループだけではなく、グループ全体で協力して動いていくことを目的としていた。さらに、discord には、グループ全体で話し合いや連絡事項を伝える場所、各ミニグループが話し合う場所、そして、その他にグループ全体で雑談をする場所を作った。全体の雑談では実際に日本のアニメや映画、お互いに持ち寄るお土産について話していた。しかし、このグループ全体交流では1つ反省点がある。ストラスブール大学の皆さんのほとんどが参加してくれていたのに、日本ではほとんど私だけが受け答えしており、他のメンバーにあまり参加してもらえなかったことである。私からもみんなにこの交流の意図を伝えたり呼びかけたりするべきだったと反省した。周りを巻き込みながら大人数で親交を深めていくことの難しさを知った。しかし、全体交流での話題がミニグループで持ち帰られて交流に発展したり、実際に当日お土産交換をしてお互い打ち解けたりすることができたので、結果的には効果があったのではないかと思う。

また、ストラスブール大学との合同ゼミでは、私は安蒜さんとリヴィアさんの3人のミニグループで発表を行った。ミニグループ活動では、話し合いの初めに必ず雑談をするようにし

ていた。これは会議におけるアイスブレイクのような役割もあるが、合同ゼミの発表をより良いものにするためにお互いを知り親交を深めたいという狙いもあった。結果として、柔らかい雰囲気では会議を始めることができ、発言の多い活発な議論につながったとともに、お互い歩み寄りながら方向性を定めていくことができた。これらの事から、ストラスブール大学との合同ゼミでは、集団における親交の重要性、難しさ、効果を学ぶことが出来た。交流の時間は楽しく、非常に有意義なものであった。

ハイデルベルク大学でのディスカッションについて振り返る。そこでは、私は書記のようにメモを取りながら内容を整理することと、議論がより深まるような問いの提示を心がけた。私たちは、ハイデルベルク大学の副専攻が哲学の学生さんと話し合いをした事もあり、非常に哲学的で難しい議論をすることが多かった。しかし、私の他にも、問いや用語の解釈を提示する人、解釈や小さな疑問を都度聞いて消化してくれる人、ほかの文献を参考に新しい見方を提示する人など、それぞれが違った役割を担いながら話し合いを活発に行うことができた。議論における役割分担の大切さを学ぶことができた。また、個人的な感想ではあるが、修士で哲学を学ぶ人は、解釈の仕方が上手く、問や概念を簡潔に捉え、言葉にできることがすごいと思った。私自身も、簡潔かつ新しい見方考え方を提示できるようになりたいと思った。

徳江さんら現地の人との関わりについて振り返る。私は研修4日目から体調を崩して特に徳江さんに非常にお世話になった。異国の地で体調だけでなく精神的にもつらいときに、たくさん優しい言葉をかけてくださったり、気遣ってくださったりした。また、徳江さんを近くでたくさん見ていると、初めて会う人とかかわり方や交渉術がすごく、バイタリティ溢れる方だと感じた。また、フランスの医療従事者の方々も外国人のまともにコミュニケーションできない私に様々な優しい言葉をかけてくださり、私も日本で困っている外国人には心強く思われるような安心されるような言葉をかけられる人になりたいと思った。

最後に、多文化や宗教についての学びにおける考えの深まりについて説明する。まずは、キリスト教の教会を見学して考えたことについてである。聖霊教会、ロマネスク様式の教会、ステンドグラスの素敵な教会の合計3つを見学した。それぞれ私は全く感じ方が異なった。異なる感想とそれについての考察を述べる。聖霊教会では、人々の懺悔、後悔、悲しみ、苦しみからの救いを強く求める声を強く感じ、なんだか胸が苦しいような、締め付けられるような感覚になった。これは、実際に聖霊教会も損傷をしたことがあるように、聖霊教会の周りで激しい戦争が過去にあったことが原因として大きいのではないかと考察した。ロマネスク様式の教会では、学校のような雰囲気が強いと感じた。この教会に入る前に隣に学校があったのが印象深かっただろうかと初めは考えたが、友人と話して、これは教会が昔学校としての役割を担っていたことに由来するのではないかと考察した。ステンドグラスの素敵な教会では、圧

倒されて引き込まれてしまうほど繊細なステンドグラスがあった。しかし、あまりにもきれいで、信者は教会で神に一番目を向けなくてはならないのにこれでいいのだろうかという疑問が強く残った。これは、友人とも議論を行った。文字を読めない人やもともとキリスト教ではない土着の宗教を信仰していた人達にとって、ステンドグラスで目を引き、そのステンドグラスに描かれたキリスト教の教えを少しずつ学んでいってもらうことが重要だったのではないかという考察やステンドグラスに推し絵が描かれているのに目を引かれたとしてもそれはキリスト教の教えが描かれた「きれいなステンドグラス」に目を向けているのであって、それは神に向かうことではないのではないかという考察を行った。後者のような美についての考えはキルケゴールなどの思想にも似たようなものがあるらしいので調べてみたいと思った。また、特異な能力や功績を持つ人(人々が神の様にあがめた人らのことだろうか)や土着の宗教の神がキリスト教において聖人とされたが、成人が描かれている絵がこの教会にあった。その聖人は動物と話せるとされていたが、これは動物倫理を考えるうえでカギとなる考えではないかと思った。ディズニー映画のプリンセスも動物と話せることが多い。自分たちが話せるわけでもなくとも、聖人やディズニープリンセスのような動物と話せる人たちにあこがれや尊敬のような感情を持つことは動物の尊重の一つの形となりうるのではないか。それらは動物の気持ちを理解しようとする素直な態度につながるのではないかと考えた。

これらの学びを経て、チームでよりよいもの、よりよい思想を練り上げるということや異文化への接し方、宗教の態度が現代の思想にも十分に応用できるものであることを学び、非常に学びの多い研修とすることが出来た。これから、この学びをあらゆる場面で役立てていきたい。

## ■学生 D

私が国際哲学特講を通して感じたことは他者とのコミュニケーションがいかに困難なことであるかということと、そんなコミュニケーションの手段の一つである言語というものの重要性です。

まず、今年度の国際哲学特講では昨年度までと異なり、テーマ毎に私達とストラスブール大学の生徒が四つに分けられたグループの中で、さらに少人数のグループを作るミニグループシステムが導入されました。私が所属したミニグループは日本人二人とフランス人一人という三人構成のグループで、第一回合同授業の後にチャットで話し合い、月曜日の夜に隔週で研修までに通話の時間を取ることに決めました。定期的な通話のおかげでたくさんのコミュニケーションを取ることができ、お菓子以外にもエマの好きなアニメのガチャポンをプレゼントしたり、反対に手作りのプレスレットをプレゼントしてもらったり、四日目の自由時間では

グループの皆で昼食を食べたり、旧市街を見学したりと短い時間の中でとても仲良くなれたと思います。ストラスブール大学との合同ゼミが終わった今でも、交流が途絶えないことがその証ではないでしょうか。

一方でこのようにスト大の学生はもちろん、ハイデルベルク大学の学生との交流が可能であったのは私達ではなく、彼らの努力によるものだと思っております。日本の学校教育を通して何年も学んだ英語も第二外国語であるドイツ語も、もちろんフランス語も咄嗟に口から出てこない私が、何ら不自由することなく彼らと交流することが出来たのはそれらが日本語で行われたからです。ハイ大との合同ゼミでは同じグループになったヒュプシュマンさんの発表を基に議論を行いました。四部構成の論文のような内容の濃い議論ができたのは、哲学が副専攻の彼が和辻哲郎の『風土』を私達以上に深く理解しており、それをグループ全体に共有してくれたからです。そんな彼は日本のアイドルが好きで13歳から日本語を学び始めたと言っていました。スト大の学生たちも日本のアニメや漫画が好きだから日本語を学んでいるそうで、外国語に対する彼らと私の姿勢の違いはそこにあるのだと感じています。あくまで言語はコミュニケーションの道具であり、単に言語を学ぶだけでは不十分で、言語を使って何を・誰を知りたいのかという部分が重要なのだと実感しました。

また、今回のスト大との合同ゼミでは主に生命倫理、動物倫理、肉食について議論しましたが、二日目の終わりに黒田先生はメルロ・ポンティの『語りかける身体』における言語のないコミュニケーションは可能であるという主張から、人間以外の存在もコミュニケーションは可能であるとお話されていました。さらに今回の研修では例年までと異なり五日目にナッツヴァイラー強制収容所を見学しましたが、そこで学んだことも踏まえると相手を自分と対等・同じ存在だと思えること、共感を抱けるということがコミュニケーションにおいて最も重要なことだと改めて思いました。

ドイツやフランスの風景や街並み、見学した教会や美術館、そこで接した現地の人々、食事についての意見など述べたいことはまだまだ非常ありますが、本レポートでは研修を通して私が一番考えさせられたコミュニケーションというものについて中心に述べてきました。これをレポートのテーマに据えようと思ったのはこの研修を通して海外の人々だけでなく、研修前まで話したことがなかった国際哲学特講の他の学生とも親しくなれる機会が持てたからです。そして、そのような雰囲気の良い国際哲学特講であれたのはひとえにこの講義を担当してくださった君嶋先生のお人柄によるところだと思っています。本当にありがとうございました。

## ■学生 E

今回の研修では、全日程を通して、学びに満ちた素晴らしいものになったと思う。

ストラスブール大学での発表、ディスカッションはそれぞれのグループで動物倫理や、環境倫理について事前の準備をもとに議論や発表が展開されていった。

私の所属するグループでは、動物倫理のとりわけアニマルウェルフェアについての発表で、動物に対する感情、(共感、憐れみなど)について議論を深めた。

事前の準備では、discord を用いたテキストメッセージ、及び音声チャットを用いて行ったが、ストラスブールの学生とのコミュニケーションでは、行き違いもいくらかあった。それでも最終的に完成したスライドは満足いくものになったと思う。

ディスカッションでは、発表の内容を踏まえたテーマについての討論となった。ここで考えたのは、私自身にとっての倫理というものについてだ。私は倫理の源泉は他者に対する憐れみや共感であると考えていた。しかし我々が則っている倫理というものはそれだけではない。自分が所属する家族や学校、あるいは地域の共同体といった社会集団が歴史的に形成した倫理意識もあり、そしてそれは教育が人に内面化することで存在している。私はこの交流を通じて文化交流の難しさや意義深さを知ったように思う。共通の言葉を用いても、私は彼らの歴史をすべて知ることはできないし、彼らが動物に対してどのような感情を抱くのか、分からない部分も多いと思う。ストラスブールの学生の中にはヴィーガンであるという学生が数人いてそれを自分の在り方として主張していた。彼らが、どんなことを考えてヴィーガンであろうとするのかは聞けなかったがそれぞれにそれぞれの主張があるのだろう。私自身、食についての規範意識について考えたことはなかった。ネットニュースを見ると美術館で美術品を毀損するパフォーマンスを見ることがある。私はそれに対し、なんの意味があるのかと思って、美術館のスタッフに同情していた。しかし彼らパフォーマーにも彼らの内面化された規範意識があり、それに則った行為が、あのパフォーマンスだと思うと彼ら主張の多少はわかってきたように思える。

ストラスブール市街での見学では、昼食をそれぞれのグループでとりつつ、買い物や見学に明け暮れた。このとき印象的だったのは、私が大聖堂の中を見たいといったときに案内してくれたストラスブールの学生だ。彼女は自分が小さいときに教わったことをそのまま教えているだけと言っていたが、その案内は非常に親切で、中の天文時計や小さな犬の彫刻、ステンドグラスにまつわる事件など、細かいところまで日本語で詳しく教えてくれた。

ストラスブールの学生との交流を通じて思ったことは、ざっくりと言えば「話してみなければ分からない」ということだ。人の考えも気持ちも言説として、ネット上の記事として、インターネットの海に永遠に保存されているように見えて、その堆積の中で沈黙し忘れられる。私にとって彼らとの交流は一瞬のものであったが、この人生を通してみても、尊いものになっ



たと思う。それは彼らとの対話のなかで思いや考えが行き交ったからであり、フランスの人に日本語で話し合うという奇跡的な出来事ゆえだろう。私も彼らの言葉で話したいと思えたとし、そうして交流というものは生まれてくるのだろうと思えた。

先に奇跡的という言葉を使ったが、この研修が成立していることもまた、その一つといえるだろう。かつて法政大学の教授だった安孫子先生が始められたという国際哲学特講だが、大学の学部生の身分で、このような機会に恵まれて幸運に思う。君嶋先生はじめ、CEEJA の徳江さん、ストラスブールの黒田先生など様々な方の尽力によって成立している。具体的なビジョンは立たないが、その尽力に報いるような何かが、なんらかの形で結実するような人生になればと切に思う。

## ■学生 F

アルザス研修に行って私が考えたことは、ただの食事や服装、言語といった文化の違いだけでなく、その土地が形成する特有の価値観や、常識の違いについてである。

はじめに、ドイツで開催された合同ゼミで我々が学んだ風土と文化論について、大きく離れたアジアとヨーロッパの風土論について様々な学習があった。特に、地形的な因子がもたらす建造物の作りの違いや、そこからさらに発展した温泉と風呂、シャワーについての文化の違いは、風土がもたらす文化の代表として考えることができるだろう。このような風土論は過去に執筆された和辻の論文にさらに新たな価値観が加わり、さまざまな形に変化していると言えるだろう。今後、私はこういった文化論について知見を深め、新たな風土論について考えたいと思った。

次に、フランス、ストラスブール大学で行われた日仏合同ゼミについて、ベジタリアンの人々に対しての文化の違いが大きく現れていると考えたい。同じ割合を占めているはずのベジタリアンの人達が、フランス人の生活にわかりやすく見える位置にいたり、その主張を世間一般が寛容に受け入れていることが理解できた。また、それにより形成された独特の風土感はレストランでベジタリアンメニューを気軽に提供できたり、個人の主張に合った生活を送りやすくするために製品のパッケージに記載があったりと、日本と大きく異なった文化を形成していた。この、異なった文化はその土地にいる人々の性格にも現れており、周りの意見に合わせるといった日本人的な「空気を読む」という行動が正義だとされていないように体感した。それぞれの人は、それぞれの思想を持っており統一しがたく、それを統一するべきでもないフランスの人は考えているのだろう。そう考えた理由として、フランス人生徒が述べた、「誰が何をしていても僕の生活には関係がなく、僕が何をしていても誰も何もいう権利がない。それは家族でも同じ」という言葉が挙げられる。この言葉は周りの迷惑になら

ないように、大きな波風を立てまいとする日本人の古風的な考えと正反対の主張であるだろう。

しかしながら、現在の日本でこのような古風な考えのみが蔓延しているとも考え難い。現在日本では SNS などの発展により、個人が主張を述べやすい世の中へと変貌していると考えられる。それにより、集団や集落の考えや伝統にとらわれない人々が増えてきていると考えられる。日本でも今日ベジタリアンや、ヴィーガンのニュースを見るようになったのは、そのような文化の変化による風土の再形成であると考えられる。

次に、見学したナッツヴァイラー強制収容所についての感想を述べる。今日、戦争に関する資料や情報は我々は歴史の授業や文献で確認することができる。しかしながら、実際に行われた行為や残虐性などは実際の土地に行って話を聞き、現物を見なければ理解し難い。今回、この収容所を見学した我々は言葉を失うほどの残虐性を持った人間が起こした、極悪非道の行為の遺物を見た。戦争は正義と正義のぶつかり合いだという言葉はよく耳にするが、正義が起こしうる行為はあまりにも想像を大きく飛び越し、人間を生物だと思わない卑劣な行為を引き起こしていることが理解できた。こういった過去の遺物を、後世にしっかりと残し、新たな戦争を引き起こさないために利用していかなければならない。

最後に、この研修旅行を計画、実行していただいた、学校事務の皆様、実際に研修に共に参加し教鞭を取っていただいた先生、そして現地で案内や円滑な段取りを組んでいただいた徳江さん、そして現地で出会ったドイツ、フランスの学生の皆様に感謝を申し上げ、このプログラムが今後も良い学習を継続していくことを願ってこのレポートを締めさせていただきます。ありがとうございました。

## 5 写真でたどるアルザス研修

研修の様子を収めた写真を紹介します。

### ■ハイデルベルク大学との合同ゼミ







■古い橋にて





## ■ストラスブール大学との合同ゼミ











■ナッツヴァイラー強制収容所にて





■ストラスブール大聖堂バルコニーにて



■オーケーニスブル城にて

